


百合のリアル

牧村朝子

女に生まれて、
女を愛して。



百合のリアル

牧村朝子

星海社

38



はじめに

はじめまして。牧村朝子まきむらあせこと申します。

タレント／レズビアンライフサポーターとして活動をしている、二十六歳の女性です。日本生まれ日本育ちで、今は最愛の妻と、フランスのパリに住んでいます。

おそらく今、あなたの頭には、

なぜ女なのに「妻」がいるのか？

なぜパリなのか？

という疑問が浮かんでいると思います。それについてはのちほど、本文中であなた宛て

の手紙に書かせていただくとして、まず「この本が何のための本なのか」ということをご説明しますね。

この本は、レズビアンのためだけの本ではありません。同性愛者の自伝でもありません。「レズビアン」という概念と、牧村朝子という事例を通して、男とか女とか、同性愛者とか異性愛者とか、オタクとか優等生とか、B型とかA B型とか、色々ザクザク切り分けられてるこの状況との、向き合い方を見つけるための本です。

ですから、レズビアンではない方にも読んで頂きたいですし、この本を我が子の本棚に見つけた親御さん方もどうかパニックにならないで頂きたいなと思います。

さて、今あなたにお話ししているわたしが、今までなにをやってきたのか。

十歳で女の子に初恋、即失恋。同性愛はよくないと、男モテのための努力を十二年間重ねました。その結果色々な男性に告白してもらったけれど、愛しているはずの彼氏の体に

ドキドキできず、そんな自分を劣等な女だと責めました。また同性に恋をしても、「自分はレズビアンとかいって個人的アピールしたいだけ」と自己嫌悪に陥ったり。性同一性障害かもと男装してみたけど、男になりたい訳じゃないから苦しくなってしまうたり……。

そんなふうに悩んだ先、二十六歳で辿りついた答えは、愛する「女性」との結婚でした。そして今パソコンに向かい、あなたに伝えたいことを本にしているところです。

本書は、対話形式で進んでいきます。同じ事象も、角度が違えば見え方が全く違ってくるもの。様々な立場から意見を出し合うことが大事だと思い、こういった形式を選択しました。ナビゲーターとなるのは、四人の若者と一人の先生。若者たちは、先生からいくつかの質問を受け、思考し、議論を深めていきます。あなたもぜひ、彼らと同じく「自分はどうだろう」と考えながら読み進めてみてください。

四人の若者、一人の先生、そしてあなたと、わたし。それぞれのリアルを生きるための、それぞれの答えを一緒に探していきましょう。



ヒロミ(24)

モテたーい！



あ、そういえば
さっきもらった
チラシ……

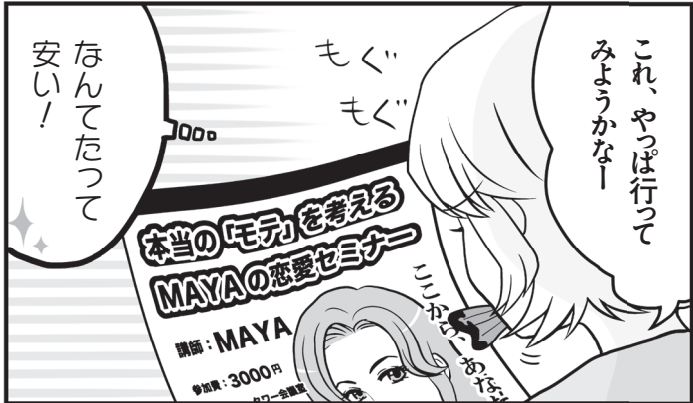
ゴソゴソ



たい焼き
3つ!!

ハイヨ

何よあいつ、
お前は俺のこと
全然わかってない
だなんて〜!



これ、やつぱ行って
みようかなー

もく
もく

なんてたつて
安い!

本当の「モテ」を考える
MAYAの恋愛セミナー

講師: MAYA

参加費: 3000円
27-11-11

お前の幸せを
祈ってる、と

送信

本日の「セブ」を覚える
MAYAの恋愛セミナー

講師：MAYA

参加費：3000円

場所：××タワー会議室

「恋は、甘いけれど辛くも
そんな恋が私を成長させたんだって
恋をして、一人で悩んでた時よりも
自分自身を大切にできる人にな
あの頃夢見た自分と比べてみる
恋の「真」を知りたいです。
恋は、辛いけれど、それが
恋だから、そんな恋が私を成長
させたんだって」

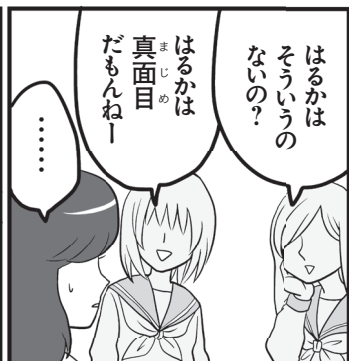
ここから、あなたの恋が動き出す。

.....

長年想い続けた
女の結婚……
俺にはお似合い
の展開だ

めっちゃ
美人！

行ってみようかな……





どういふこと？
どうして？
お金がないの？



手術を
するつもりが
ない……？



サユキ(30)

今のままが
自分にとっては
自然だから



……明日会う
「センセイ」は、
なんて言うかな
……



私には
理解できないわ

MAYAの恋愛セミナーへ

ようこそ
皆さん

マヤ先生(?)

今日は

きれい……

皆さんと

「本当のモテ」

について

考えていきたいと

思います

ドキドキ

ところで、

ご存知の方もいるかも
しれませんが

私は女性のパートナーと

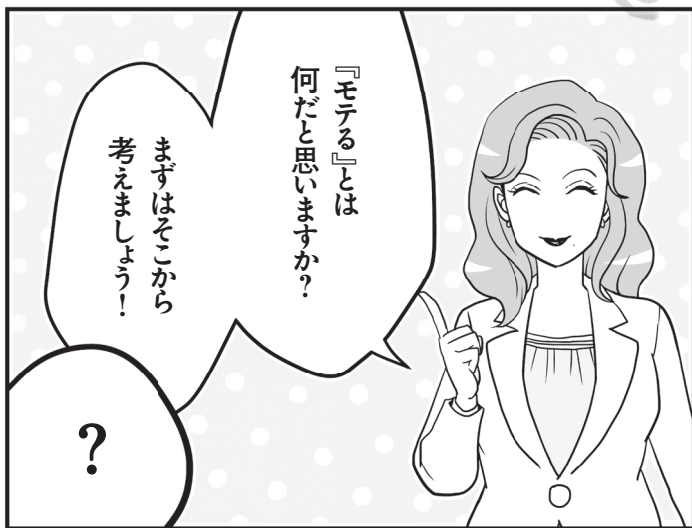
暮らす人間です

いわゆるレズビアンと

呼ばれる者ね

!!





1章 あなたは「モテたい」？ 誰にどう「モテたい」？

「こんな男がモテる」「こんな女が愛される」の、その前に

マヤ



ヒロミ



「そもそも『モテる』とはどういう状態のことかしら。『モテる人』とはどんな人のことかしら？ 皆さんの考えを聞かせてちょうだいね」

「そんなの、たくさんの人に好きになってもらえることに決まってるよー。あーあ、私もそうなりたい。相手いくらでも選べそうだしさ」

アキラ



「うーん、俺の『モテる』のイメージは、好きな人の心が確実につかめる、って感じですかね」

マヤ



「『たくさんの人に好きになってもらうこと』『好きな人に確実に好きになってもらせること』、という意見ね。二人は、自分のことモテないと思ってる？」

ヒロミ



「はい！ 私全然モテない方なんです！ 頑張つてモテ服とかモテメイクしても、いまいち反応悪いんだ」

アキラ



「俺も、恋愛は下手じゃないかなって思います……女心つかむのがすごく上手くてフラれたことがない、みたいな奴見ると、自分には無理だなって」

はるか



「……わ、私は、美人で明るくて人気者、みたいな人になればモテるのかな、って……」

マヤ



「ふふふ、緊張しないだね。このセミナーは、いわゆる『モテるためのテクニク』を教える場ではないの。『自分は何をモテだと思ってるのか』『それを自分には本当に望んでいるのか』まずはそこからよ。例えばヒロミさん、今言った『モテ服』って、どういうものがあるかしら？」

ヒロミ



「うーん、一見清纯だけど、どこか一カ所色っぽさをアピールしてる、みたいなのが多いかな？ ちょっと胸元が広いとか」



「なるほど。どうしてそういうものが『モテ服』なんだと思う？」

「そりゃあ、男の人が色気いろけに弱いからだよね〜」

「別に男全員が女の人をそういう目で見てるわけじゃないんだけど……。俺、セクシーな服って苦手だし」

「え、でも大体の男の人はそうじゃないのかなー」

「ふーん、『大体の男』にモテりゃいいってこと？ そうなれば満足なんだ」

「う、そう言われると……」

「体目的の奴とか、とにかく淋しいから一緒にいてほしい、みたいな奴に寄ってこられるのって自分は嫌いだね。自分と合う人間を確実に選ぶ勘、みたいなものがある奴が『モテる』んじゃないの。ま、自分はその勘が鈍いらしくて、今

ヒロミ



恋人がいらないだけだよさ」

「あー、なんかサユキさんてカッコイイ系だもんね！ 年下の男の子が好きだったりしそう！」

「男にモテたいなんて思ってないよ。自分、女が好きだから」

サユキ



ヒロミ



「サユキさんもレズビアンなのー？ マジで？」

サユキ



「そうだけど。何か？」

ヒロミ



「いやー、二人もレズビアンの人に会ったのって初めてでちよつと緊張しちゃう」

サユキ



「へえ。ヒロミちゃん、今まで会った女全員に、レズビアンかどうか確認とってきたの」

ヒロミ



「か、確認!? うーん、それはしてないですけどお」

マヤ



「いいえ、場違いな人間なんかじゃありません。このセミナーは、いわゆる『レ

アキラ



「あのー先生、もしかしてこのセミナーって、女性限定とか、レズビアン限定だったんじゃないですか？ だとしたら俺、完全に場違いな人間です。俺、女の人にモテたい男なんですが……」

マヤ



ヒロミ



「うーん、そう言われてみればそうかもしれない……あれ、でもなんで？」

サユキ



「自分は女にモテたい女だから、『男ウケ』を研究しても仕方ないんだよね。なんでか、『モテる』って言うത്『異性からのモテ』に限定されてる感じがあるけど」

「そうね。単純に『モテ服』と言っても、今ヒロミさんとアキラさんの意見が食

い違ったように、男だから、女だからこういうものが好き、という風には断言

出来ないの。また、サユキさんや私のような、『男性よりも女性にモテたいと思

っている女性』もいるということがわかったわね。こうして考えてみると、『モ

テる』にも色々あると思わない？」

「あのー先生、もしかしてこのセミナーって、女性限定とか、レズビアン限定だ

ったんじゃないですか？ だとしたら俺、完全に場違いな人間です。俺、女の

人にモテたい男なんですが……」



マヤ

ヒロミ

「自分自身のこと？」

「そう。それが満たされないから、私たちは寂しかったり、焦ったり、辛かったりするの。だけどそもそも、愛されたい『自分自身』を私たちは理解しようとして努力しているかしら？ 『ありのままの自分自身とはどういう人間なのか』をよく知ることの方が、ただ漠然と『男モテ』『女モテ』のテクニックを磨くよりも



マヤ

はるか

ズビアン』や『女性』に向けたものではなくて、性や愛に悩む全ての人を対象としています。ぜひ聞いていってちょうだい。『モテ観』変わるわよ」

「……どうして、レズビアン限定にしなかったんですか？ 先生、お話ししづらくないですか？」

「ふふ。私も昔はね、自分がいわゆるレズビアンだからという理由で、参加者をレズビアンに限定したセミナーを運営していたの。でも続けるうちに、参加者に条件をつける必要を感じなくなっって、今のような形に変えました。自分自身のことを愛してほしい、知ってほしいという欲望はみんな同じなんだ、ということに気づいたのよ」



有効なのではないかしら」

「確かに俺も、自分のこと理解してくれる女の人にモテたいって思ってます。でも、自分が何が好きかとか、嫌いとか、割と知ってる方な気がするけどな……」

「アキラさんの目には、あなたを理解しようとする女性つとが魅力的みりよくてきに映るということね。なら、『自分をわかってくれる人と愛し合いたい。だから、自分がこちらに好意と理解を示してくれたのを確認してからこちら也喜欢になるう』と考える女性のことは、どう思う？」

「う……そういうのはちょっと……めんどくさいです」

「あんた自身がそういうタイプなんじゃないの？」

「そ、そんなことないですよ」

「ふふふ。アキラさんがそうだ、と言っているわけではないのよ。でも、条件をつけずに相手のことを知ろうとする人の方が魅力的で、モテそうだ、というの



マヤ

ヒロキ



マヤ

はるか

はわかるでしょう」

「あ、あの……。自分自身のことをよく知れば、周りから理解されるようになるんですか？」

「『自分自身のことを知れば、周りのこともわかるうと思えるようになる』ということね。人が、人のことを一〇〇%理解しきることは、おそらくできません。自分自身のことのでさえ、ね。なぜなら、人は刻々と変化し続けるものだからなの。だけど私たちが求める『理解』とは、『自分が今何を考えているか常に把握はあくしてほしい』ということではなくて、『ありのままの自分を認めてほしい』ということでしょう。『わかってくれる人』というのは、実は『ありのままのその人を認める』ことができる人のことじゃないかしら」

「私、別れた彼氏に『お前は俺のこと全然わかってない』って言われたばかりです……」

「自分自身の声に耳を傾けられる人は、相手自身のことにも感じられる。ありのままの自分を認め、相手のことを尊重そんちようできるようになります。『男だからこうすればモテる』『女だからこう生きれば愛される』というような枠組みを外して、違



「う、うーん、改めて聞かれると困るんですけど、可愛いし、おっぱいあるし、
「アキラさんは、女性にモテたいのよね。どうして『女性』がいいのかしら？」

男か、女か。普段、どうやって判断してる？



「う角度から考えてみましょうね」

「違う角度から見ても、自分自身は変わらないんじゃないでしょうか……」

「うふふ、それは先のお楽しみね。はるかちゃんは、『変わりたい』と思ってい
るのかしら？」

「あ、えっと……そ、そうです、たぶん……」

「そうなのね。あらまあ、そんなにかしこまらなくて良いのよ。気分を楽にし
て、一緒に考えましょうね」

マヤ



やっぱりモテるなら女の子だなんて思います」

「そうよねえ、わかるわ。じゃあアキラさんにとって、女性かどうかの判断基準は、おっぱいかしら？」

アキラ



「いや、おっぱいだけじゃなくて……あの、あ、あれがついてるかも判断基準です」

サユキ



「人のパンツの中身なんて、付き合うまでわからないだろ」

アキラ



「えっ……ああ、うーん、確かにそうですけど……」

「アキラさんは、なんとなく見た目で女性だと思った人に対して『女性器がついてるはず』という想像をしてるんじゃないかしら」

アキラ



「多分そうです。でも、体格だったり、服装だったりで、性別ってなんとなくはわかるものじゃないですか？ そんなにたくさん『女だと思ってたけど男だった』ってことがあるとは思えないです」

ヒロミ



「私もいちいち人の裸を確認したりはしないけど、男は男って大体わかるな」



「ええっ、じゃあ、もしかしたら私の脳みそが実は四九%男だった、みたいなこともありうるの?」

「パーセンテージで簡単に表せるものではないけれど、私とヒロミさんの『肉体的な女っばさ』は絶対に同じではないわね」



「そうね。今二人が言った通り、『男』か『女』かというのは、見た目で大体わかるのよね。言い換えれば、大体しかわからないということでもあります」

「大体? 男におっぱいはないじゃん」

「絶対的に見える肉体的な性差、つまり『オス／メス』の差も、単純な二色に塗り分けられるようなものではないのよ。人間は、胎児の時に男と女に分かれるとされているわね。これを『性分化』といいます。この性分化は、それぞれのホルモン分泌量や、それぞれのプロセスによって、染色体、脳、生殖器など、色んな部分で起こるものです。性分化の結果、例えば脳や生殖器が、『どの程度その性別っぽくなるのか』は、人それぞれなのよ」

アキラ



「人間の体って、そんなに個体差があるんですね……」

マヤ



「男のおちんちん、女のクリトリスも、元は同じものです。胎児の頃に、その二つに分化していくのね。これも、常に完全に分かれた成長をするわけではない。男女どちらともいいがたい性器を持って生まれてくる人もいる。そういう方のことを医学的には性分化疾患（しゅっかん）と呼びますが、性腺（せいせん）が精巣（せいそう）や卵巢（らんそく）になりきっていない、膾（ちっ）や子宮（しきゅう）がないなど、とてもたくさんの例があって、ひとまとめにはできません。ともあれ、まとめて性分化疾患とされた方々の多くが、自分では『男／女』のどちらかだとはっきり考えていらっしやるわ。『男／女』に人を振り分けること、あるいは自分でどちらの意識を持つかということ、人間の数知れない個体差の上に成り立っている選択といえるわね」

「男〓オス」「女〓メス」とは限らない？

マヤ



「今『オス／メス』『男／女』という二つの言葉を使ったけど、これらは、必ず

マヤ



アキラ



マヤ



ヒロミ



しも同じ意味にはならないのよ。『男／女』の区別というのは、人間が便宜上、べんぎじょう世界を理解しやすくするために作り出した『言葉』であって、男だから、女だから、と無条件に二つのグループに分けられる、ということではないの」

『オス／メス』と『男／女』が違う？ うーん、よくわかりません……」

「そうね、ではちょっと考えてみましょう。『男／女』と聞いた時に、浮かぶイメージであるわよね。例えば『男は力仕事をするもの』だとか『女はきれいなドレスを着たがるもの』だとか」

「はい、わかります。俺、力仕事とかめっちゃ苦手ですけど」

「あら、申し訳なさそうにする必要のないのよ。確かに、中学校のスポーツテスト結果などを分析すれば、生物学的な『オス』の方が同世代の『メス』に比べて筋力の平均値が高い、という結果が出るでしょう。でもそれはすなわち『男は力仕事をするもの』『力仕事ができない男は男失格』しっかくという『決まり』を作るものなのかしら。どうして、そんなイメージが生まれたんだと思う？」

マヤ



ヒロミ



アキラ



ヒロミ



アキラ



はるか



ヒロミ



「そりゃあ、昔は力仕事は今よりずっと多くて、力持ちの男を使う方が効率が高かったからじゃないですか？ お城造るとか、トンネルを掘るとかそういうの。」

私が昔のお殿様で、アルバイト募集するなら断然頑丈な男の人だよな」

「アキラさんみたいなのが来たら、面接で落とされちゃうってことですか？」

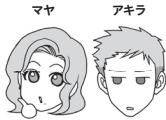
「はるかちゃん……」

「ま、手は多い方がいいから雇ってあげるけど、倒れたらクビだよな。フー、使えない奴だったな、って」

「ひどい……」

「ちょっと、本気で落ち込まないですよ。今が何時代だと思ってるのよ」

「とつても大雑把おおざっぱだけど、今の話もきつと要因の一つね。『労働力として、力仕事のできる男が重宝ちようほうされた』時代があったこと。他にも色んな複雑な理由があ



マヤ

アキラ

『『当たり前』』と思いがちなところね。日本でもかつては、他の国に負けないために、『男』と『女』がそれぞれの役割を果たしながら『お国のために』頑張る必要がある……と教えられていたわよね。『男』チームの役割は体を鍛え、家を



マヤ

ヒロミ

るわね。男とはこういうもの、女とはこういうもの、というような考えは、長い歴史の中でつくられてきたものなの。「つくられてきたもの?」

「そう。瀬戸内海の島々には『男漁女耕(男は漁業、女は農業)』という伝統があったというし、古代中国でも『男耕女織(男は農業、女は布を織る)』とうたわれた詩編が残っています。近代日本でも『男はサラリーマン、女は専業主婦』というモデルがあったし、そうとは限らなくなってきた現代日本にも『男は強く、女は優しく』という期待があったりするでしょう。こういう風に、性別によって持たされる役割を性役割(ジェンダーロール)といいます」

『『男は強く、女は優しく』って、なんとなく当たり前だと思ってました』

マヤ

アキラ



守り、一家を養うこと。『女』チームの役割は家事をし、子育てをして、男性を支えることでした。『オス／メス』は分類の言葉だけれど、『男／女』は分類だけでなく分担の言葉にもなったの。個人が誰と幸せになりたいかということよりも、『男チームと女チームで日本という国を強く大きくしよう』ということが重要視されていた時代だったが故ね」

「うーん……。今、『個人の幸せ』って言ったら、俺は全然違うことを考えるなあ」

「そうね。戦争が終わり、日本が豊かになっていくにつれて、『お国のために、みんな男チームと女チームで頑張ろう』という考え方をする必要も薄れてきました。もちろん男女で役割分担する価値観を尊重する方々は今もいらつしゃるけれど、性別にかかわらず平等な機会をとという考え方は『男女共同参画社会基本法』を境に主流とされているわよね。ただ、『オス／メス』という概念に上塗りされてきた『男とは』『女とは』という考え方は、今も色々な形で残っています。そういった『男とは』『女とは』という意味づけが『男／女』そのものであるかのように、私たちは錯覚してしまいがちなのよ」

サユキ



「運動が苦手な男が劣等感抱いたり、車やバイク好きな女が『女らしい趣味じゃないから』ってそれを内緒にしたり、ってよくあるよな。自分も、バイクが趣味なんだけど」

ヒロミ



「わかるかもー。私すっごくお酒に強いんだけど、『お酒弱い子の方が女らしくて可愛い』って元カレに言われてから、初めて会う男の人の前だと酔ったふりするようになっちゃった。あ、そうか、これって私が『メス』だから、酒に弱くなきゃいけない、ってわけじゃないよね」

はるか



「私も、母に、『女の子らしくしなさい』って言われます……」

マヤ



『オス／メス』『男／女』という二分法にとらわれるあまり、その中での個体差を見失ってしまうと、『自分は男なんだからこうしなれば』『あの人は女なんだからこうあるべきだ』という考えにつながるのね。でも今考えてみたように、それは決して『決まり』ではなくて、イメージなの。自分や目の前の人が、そのイメージにどれだけ合っているかなんて、見た目だけでは絶対にわからないわよね」

マヤ



「あらあら、元氣を出して。セミナーは始まったばかりよ。今までと異なる考え
われたことが……うう」

アキラ



かも……」

「俺もある……。男っぽいところ見せようと思って、何でもこつちが決めて、頑
張ってエスコートしてたら『キャラじゃないのに俺様ぶっててキモイ』って言

ヒロミ



わよね。思い当たるところ、あるんじゃないかしら？」

「あ、あはは……『男だから奢おごってくれて当然』って思って、奢おごってくれなかつ
た男の人にイライラしちゃったり、それで喧嘩けんかになったり、って何回かあつた

マヤ



サユキ



「『女は絶対男が好き』『男は絶対女が好き』っていうのも同じだな」

アキラ



「そう言われると、ちょっとホッとするかも」



方を理解して、すぐに頭の中の『あたりまえ』を書き換えられる人なんていないわ。でも今お話しした中だけでも、『男／女』の『こうあるべき』というイメージにとらわれず、他人や自分を個体差のある人間として見る視点があるということがわかったでしょう」

「なんとなく、想像はつきます……。でも、その視点に立つにはどうしたらいいか、まだよくわかりません」

「そうね、いきなり自分や他人を『人間そのものとして』見ましょう、と言われてもよくわからないわね。だからこそこのセミナーでは、まず自分や、周りの人たちの『性』のことから考え始めるの。その上で本当の『モテ』を考えよう、というのがこの会の主旨しゅしなのよ。わからないことがあったらなんでも聞いてね」

「じゃあ先生、私、レズビアンってなんなのか、聞いてみたいです」

「なるほど。では次は、『レズビアン』という言葉から考えてみましょうか！」

「レズビアン」を通して、生き方を考える

あらためまして、まきむう、こと、牧村朝子といっています。まずはこの本をお手に取ってくださったことに感謝いたします。どうもありがとうございます。

わたしは人間の性についてのあり方（セクシュアリティ）について、書いたり、話したりする仕事をしています。肩書で言えば、タレントでありライターです。テレビ出演・執筆しつびつの他にも、イベント企画や悩み相談などをやっているのです。レズビアンライフサポーターと名乗ることもあります。東京で出会ったフランス国籍こくせきの女性と、二〇一三年九月にフランスで結婚し、現在はパリ在住です。

仕事を通しての夢は、幸せそうな女の子カップルに「レズビアンってなあに？」って言われることです。例えば誰かが同性を愛するということを選択する時、いちいち「レズビアン」というカテゴリに自分を押し込める必要はない。だけど「私はレズビアンです！」というアイデンティティに胸を張ってもいい、そういう雰囲気ふんいきを作りたいと思っています。

この本は、『レズビアン』というあり方を通して、個としての生き方を考える」本です。

なぜ「個としての生き方を考える」ことが必要なのでしょうか。それは、どれだけ細こまかいカテゴリーズを試みても、それ自体はけっして、わたしやあなたという、一人の人間を表すものにはなり得ないからです。

そして、「個としての生き方を考える」ためにこの本では、「レズビアン」という言葉を中心にすえました。

最初にも書いたように、わたしは今、愛する女性と一緒に暮らしています。いわゆる「レズビアン」の生き方として見られることが多いです。わたしはその見方を否定しません。でも、「レズビアンとしてこう生きなければ」という枠わくに自分で自分を当てはめてしまっていた頃、わたしはまだどこかで不自由を感じていました。「レズビアン」という言葉にとらわれなくなった時、初めて自分自身を生きられるようになったのです。

カテゴリーだけではなく、まず個に目を向けること。当たり前ですが、これは「レズビアン」だけに必要な考え方ではありません。「女」「日本人」「ゆとり」「オタク」「アラサー」「ニート」「サラリーマン」「草食そうしょく系」。社会の中で人を区別したり、まとめたりするための言葉はたくさんあります。そういうカテゴリーの箱に入ったり入れられたりする前の、ひと

りひとりに、あなた自身に、その人自身に目を向けてみてほしい——そういう気持ちでこの本を書きました。

ですからこれは、「レズビアンのためだけの本」ではありません。手に取ってくださいったあなたのための本です。

まずあなたと一緒に考えたいのが、「モテる」ってなんだろう、ということですよ。

もちろん世の中には「別にモテたくない。恋愛とか興味ないし」という方もいるでしょう。もしかしたらあなたがそうかもしれませぬ。

でも、そういう方も一度もつと遠くから、改めて考えてみてください。「モテる」って、なんですか？

女性ファッション誌では「最強・男モテコーデ！ デートシーン別着回しきまわ対決！」というような「モテ」の特集記事をよく見ます。また、男性コミック誌で「三十歳まで童貞どうていだった僕が突然女にモテまくって大金も入ってきました。このパワーストーンブレスレットのおかげです！」なんて広告を見かけることもあります。

こうした例を見ると、あることに気づきます。それは、これらの「モテ」という言

葉は、ほとんどの場合で男女関係を前提としている、ということ。「女は男に、男は女にモテたくて当たり前」だとされているから、「異性に好かれるためのテクニック」が特集され、「異性にモテるための商品」が宣伝される。

「男と女」は求めあつていて当たり前。そんな前提が、いまの日本社会にはあるのではないでしようか。

そういう「男と女、が当たり前」という考え方のことを、社会学用語で異性愛規範（ヘテロノーマティヴィティ）と言います。さらに、「生き物は男女でカップルになるように定められているんだ！ 同性愛は自然に反する！ 社会悪だ！ 治療しろ！ ていうかむしろ死刑にしろー！」というような、『男と女』以外認めない」という考え方までいくと、それは異性愛主義（ヘテロセクシズム）というものになります。

はー。息苦しい。もはや息苦しいどころか、生き苦しいわ。「それが当たり前だ」「そうすべきだ」「それが普通だ」と言われて、自分の「本当はこうしたい」を噛み殺すことほど虚しいものはありません。性の話に限らず、です。

さて、いきぐるしいあまりに愚痴っぽくなってしまいました。本題に戻りましょう。「モテる」という言葉が男女関係前提、いわゆる異性愛規範の上に使われていることが多い、

という話をしました。その考え方のおおもとには、「人間の性別は男と女のふたつである」という思想があります。男女二元論だんじょにげんろんとも呼ばれます。

この男女二元論、良くも悪くも都合がいいんですね。「男女」というのは、実はとても大まかな分類でしかありません。それでもこの分類が規範とされている背景には、例えば「女性特有のガンを市役所負担で無料診断します」というような行政ぎょうせい上の都合があります。また、「男は浮気うわきをする生き物」「女だからかわいいものが好き」など、性別による傾向を皆で共有している方が互いの理解が早いはずだ、という思いこみもあるでしょう。

「男女」が、なぜ大まかな分類に過ぎないといえるのか。ここで、「性」を構成する様々な要素をご紹介します。

「性」を構成する要素

性自認せいじにん

自分が自分の性別をなんだと思っているか。

性他認

他人から性別をなんだと思われているか。もちろん、全員の意見は一致しない場合も。

性表現

見た目、服装、ふるまい、言葉遣いに、いわゆる「男性っぽさ」「女性っぽさ」あるいは他の要素をどのように取り入れているか。

性的指向

どの性別の相手と恋愛やセックスをしたいか、もしくは、したくないか。

性的嗜好

何に対して性的に興奮するか。

性別役割

ある性別に対し、その性別を理由にして持たされる役割（例：「男なら女を守るべき」「女

が家庭を守るべき」。また更に、個人がその性別を理由にして、自分や他者の期待に応えること（例：「男だから体を鍛えよう」「女だからおしとやかにしよう」。ジェンダーロールとも）。

身体的性別

♂か♀か。性器や性染色体で判断される。肉体的性別、生物学的性別とも。

生活上の性別

どの性別として生きていくか。例えば『ベルサイユのばら』で言うと「家族の前やフランス革命の戦いの中では男性軍人として振る舞うオスカルが、恋人のアンドレの前でだけ女性として振る舞う」というように、状況によって切り替えている場合もある。

書類上の性別

身分証や戸籍といった公的書類にどの性別として記載されているか。

それぞれの性器、言葉づかい、声、ふるまい、服の趣味があります。ホルモンの影響によつて、いわゆる男性脳、女性脳の傾向けいこうを持つこともあります。染色体も、性別についての自覚も、百人いれば百通り、バラバラです。その「それぞれの差」を見ないことにして二つに分けてしまうのは、便利ですが実はとても乱暴らんぼうなことではないでしょうか。

さて、あなたはどうでしょう。改めて、前項の授業の登場人物たちのように考えてみてください。

あなたは、男ですか？ 女ですか？ 男っぽい女ですか？ 女っぽい男ですか？ それともどれでもないですか？ そしてそれは、どうしてですか？

あなたは、男性にモテたいですか？ 女性にモテたいですか？ その両方ですか？ そのどちらでもないですか？ 相手が男性、もしくは女性であることを、あなたはどうかやって判断しているのでしょうか？

地球上に、あなたと同じ人間はいません。わたしと同じ人間もいません。あの人と同じ人間もいません。みんなひとりひとり、それぞれのあり方で生きています。そして今この

瞬間の、地球人口七十億人それぞれのあり方は、一秒後に、一時間後に、一年後に、十年後に、またそれぞれ変わり続けているのです。

あなたの細胞さいぼうは新しいものに生まれ変わります。爪を切り落とし、髪を切り落とし、古い皮膚ひふをこすり落としとして。考え方も変わります。話し方も、声も、顔も、趣味も、一緒にいる人も、変わり続けます。わたしも。あの人も。みんな変わり続けていて、みんな違うんです。

常に地面が動いているような、自分というものがふわふわどこかに飛んでいってしまいうような、周りの人が得え体の知れない謎なぞの人々に見えてしまうようなどうしようもない不安から逃れるために、人は言葉による区別くべつというものを発明はつめいしました。「わたしたちはこういう人たち。あの人たちはああいう人たち」という理解を始めたのです。

でも、今この時代において、本当にそれだけでいいのでしょうか。「わたしたち」って、本当にみんな同じ人ですか？ 言葉で、ひとりひとりの違いを見えないものにしてしまっ
てはいませんか？

「モテる」「男」「女」普段なんとなく使っている言葉を見つめ直すことで、見えてくるものが

あるはずで。世界を単純な色で塗り分けるようにカテゴリ分けして理解した気になるよ
り、それぞれの色を大切に、もっとカラフルな世界を一緒に見ていきましょう。難し
いテクニクはいりません。「かけがえのない相手を、その人自身として尊重すること」。
これだけでいいんです。

2章



えええええ

こら、人の胸
じろじろ見ない。
自分がされたら
嫌でしょ



すいません

せ、性別適合手術を
したってことですか
……？



豊胸手術は
したけど、
性別適合手術は
してない



えーと、
えーと
それつて

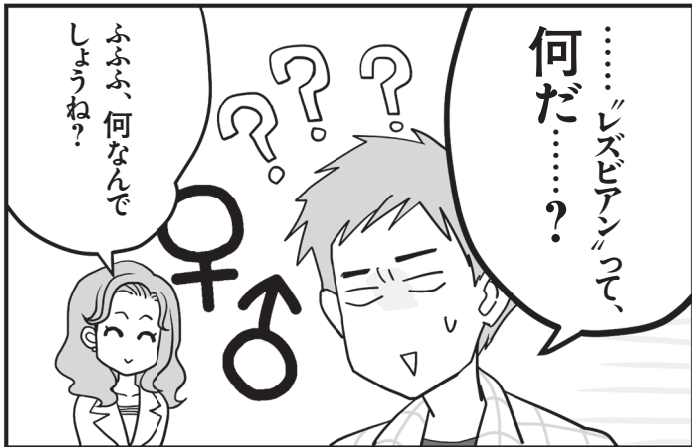
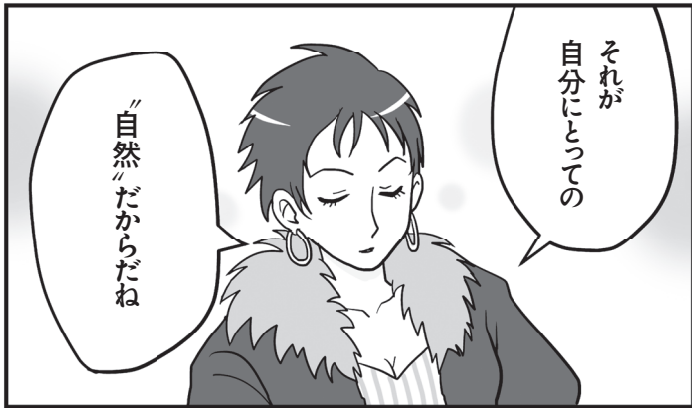
あんたと
同じものが
ついてるって
ことだよ



えっ、じゃあ、
おっぱいがあつて、
チンコもあつて、
だけどサユキさんは
女の人で、
女の人が好きで
……うーうー？

そういう
レズビアンの人
も
いるんだ……





2章 「男を愛する女／女を愛する男」以外の人たち

そもそもレズビアンって何？

マヤ



「まずはみなさんに聞いてみようかしら。『レズビアン』って何だと思う？」

ヒロミ



「女が好きな女、だよな？」

アキラ



「うん……それ以外に考えたことなかった」

サユキ



「自分もそう思うね。女が好きな女だって本人が思えばそうだよ」

はるか



「私は……よくわかりません」

マヤ



「あるわね。私は男性と付き合った経験があるから、『それはバイセクシャルだ』

サユキ



「他人に何か言われることはないんですか」

マヤ



「特にきっかけがあつたわけではないのよ。私にとって恋愛とは、相手に対して『愛』と『女』を同時に感じることなのよね。『いつなった』とかいうものではなくて、感覚的に持っていたものって感じかしら」

ヒロミ



「先生はー？ 先生は、いつレズビアンになったんですか？」

はるか



「さっきのお話で、男の人とか、女の人とか、よくわからなくなりましたし……」

アキラ



「それじゃよくわからないな……」

マヤ



「例えば、『広辞苑』ではこう書かれているわね。女性の同性愛者。レズ。エーゲ海のレスボス島の女性が同性愛に耽つたという伝説による語」

マヤ



はるか



ヒロミ



アキラ



マヤ



ヒロミ



とか『本物のレズビアンじゃない』って言われたりするの」
 「えっ、先生って男の人と付き合ったこともあるんですか!？」

「ええ。レズビアンと一口で言っても、本当に色んな人がいるのよ。男性と交際経験のある人、性的な関わりを持たなくても男性を好きになった経験ならある人、男性と友達づきあいはするけど恋愛はしないという人、男性そのものに関わりたくないという人、女性から男性になった人なら付き合えるという人、男性っぽい女性が好きという人……一〇〇人いれば一〇〇通りに違うわね」

「俺、レズビアンの人って男っぽい人が多いんだと思ってました。宝塚たからづかの男役みたいな」

「私もそれに近いかなー。女子校にいるボーイッシュで王子様おうじみたいな先輩と、それに群むらがる後輩たち! ってイメージ」

「私は、なんだか、すごい女っぽい人っていうか……えっちなお姉さんっていう感じの人たちかなあと思ってました」

「うふふ。こうやって、人それぞれのイメージを持っているでしょ。もちろん、

マヤ

はるか



今皆が言ったようなタイプのレズビアンレズビアンの女性もいるでしょう。でも、『自分はレズビアンです』と言っている、あるいは考えている人の中には色んな人がいて、一つのイメージ像イメージ像があてはまらない場合もたくさん出てくるわよね。

話をまとめましょう。『レズビアンとは女性を愛する女性だ』と言っても、みんなそれぞれ違うことを想像する。これは『レズビアン』『女性』『愛』という言葉に、みんなそれぞれ違う意味やイメージイメージを持っているからよね。もちろん、『女性とは何かわからない』『愛とは何かわからない』という人も含めてね」

「はい……」

「そこで、最初のお話、『男や女としてではなくその人自身を見ること』に戻るのよ。『男とは』『女とは』『愛とは』『レズビアンとは』だなんて、人によりそれぞれ違う意味でとらえていたり、違うイメージイメージを持っていて当たり前なの。経験や出会いを通して、一人の人間の中ですら変わってくることもあるわ。そうしたたくさんの違いがある中で『レズビアンって何?』って聞かれたら、『レズビアンだと思う人がレズビアンだ』と言うほかないわよね」

アキラ



マヤ



サユキ



ヒロミ



マヤ



サユキ



トランスジェンダー＝性同一性障害？

「自分をレズビアンだと思っていて、他人から『お前はレズビアンじゃない』って言われた時はどうすればいいんですか」

「『お前にとっては何』って言い返せばいいわ。口で言うか、心の中で言うかはおまかせするけどね♡」

「さすが先生！」

「確かに、『レズビアンかどうかは自分が決める』ことですよね。でも、『レズビアンかどうかを他人に決められる』ことだっただってあると思うんです。例えば自分みたいなMtFは、身分証の性別が男のままだったりするんで、女性限定のレズビアンイベントに入れないんですよ」

「ちょうど、次はそのことについてお話ししようと思っていたところよ。一応書いておきましょう。MtF、FtM……っと」

「え、エムティーエフ……？ マウンテン・フジ……？」

ヒロミ



マヤ



アキラ



マヤ



サユキ



はるか



マヤ



「よくわかったわね！ MtM マウンテン、F F フジ。つまり富士山ふじさんのことです」

「サユキさんが……富士山……!？」

「帰っていいっすか」

「うふふ、ごめんなさいね。ノツたけどツッコむ人がいなかったわ」

「いやいや、ボケてないですよ。本当にマウンテン・フジだと思ったんです！
MtF って何ですか？」

「MtFとは、英語で **Male to Female** の略。つまり、男性 (Male) とされて生まれたけれど、女性 (Female) として生きることを選んだ方のことです。もちろん、その反対が **FtM** になります」

「あ、わかった、せいどうじつせいしょうがい性同一性障害のことだ！ 男だけど女の体で生まれちゃったとか、その逆とか。ドラマで見たことある。病院行ったり手術したり、大変な

はるか



んでしょ？」

「そうなんですか……でもサユキさんはもう女の人になれたから、大丈夫なんです。ね。よかった……！」

アキラ



「え？ サユキさん、さつき性別適合手術せいべつてきごうしゅじゆつは受けてないからその……チンコついてるって言ってたよ。だからまだ性同一性障害なほは治ってないんじゃない？」

サユキ



「治るとか、治らないって話じゃないんだよね。自分の場合」

はるか



「！ そんなに深刻な病気なんですか……？」

サユキ



「違うよ、はるかちゃん。治さなきゃいけない体だと思ってないんだ。自分は制度上、性同一性障害とされるだろうし、社会的にはMtFだとかオカマだとかオネエだとか思われてる。だけど自分自身は、自分のことを既に女だと思ってる。そして病気とか、障害を持って生きているとは思ってない」

アキラ



「ややこしいなあ」

サユキ



「ややこしいんだよ。そして自分でそう言ってるだけじゃ、自分が女だってこと、色んな場面で認められないんだ。医者に『あなた病気ですね。手術しましょう』って言ってもらって、弁護士に『手術できたんですね。じゃあ戸籍の性別と名前を変えましょう』って言ってもらって、カラダと書類の内容を変えないと、社会的には認めてもらえない。自分がいくら女だって言おうが、人はチンコとかパスポートとかを見て『でもお前男じゃん』って言うんだよ」

「うーん」

「俺の股間見るのやめてよ……」

サユキ



アキラ



ヒロミ



「性同一性障害っていうのは結局さ、自分みたいな人間を病気として手術して、制度上の性別を変えるためにある病名でしかないと思うんだ。もちろん、『自分は病気なんだ』って考えの人もいるよ。『治療』が必要だと感じている人が、病院に通って処置を受けて少しでも楽になるならいいと思う。だけど自分はそうじゃないってこと。まあ、胸だけは、ドレスとかをきれいに着こなしたくて豊

サユキ



ヒロミ



マヤ



はるか



胸きょうしたけどさ。その必要を感じないところに、これ以上メスを入れたくはないんだ」

「サユキさんみたいなの全員が、体を全部変えるような手術を望んでいらつしゃるといふわけではないんですね……」

「そうね。日本で『性同一性障害』と呼ばれているものは、海外では『疾患しっかん』という扱いではなかったりするのよ。例えばアルゼンチンには、『ジェンダーアイデンティティ法』という法律があります。この法律では、生まれた時に決められたものと違う性別を選びたいという気持ちを、『疾患』としてではなく、『個人の権利』として扱っているの。だから日本みたいに、手術や裁判さいばんが必要とされることなく、個人の考えで性別を選んで生きていけるわ」

「へえ、個人の権利で性別が選べる世界なんて想像したことなかった！」

「自分も選びたいよ。名前も変えたい。例えば自分が事故つたら、チンコがあるからって理由で男性用の病室に入れられると思うんだけど、こんなおっぱいのあるヤツが入ってきたら周りの男も気を使うよね。自分だって見られるの嫌

サユキ



アキラ



サユキ



はるか



サユキ



ヒロミ



アキラ



だし」

「そうか、そういうこともありますよね……俺、倒れて女性用の病室に入れられる可能性とか皆無だしなあ」

「名前だけでも変えられないの？」

「ダメだね。弁護士が、チンコついてるから無理って言った」

「サユキさんって、変えなくても、素敵な名前だと思えますけど……」

「本名はマサユキなんだよ」

「それでも、手術しようとは思わないんですね」

「思わない。チンコも含めて自分だし、チンコついてたって自分は女だから」



「チンコという言葉は使っていないのだけど、現代日本の家庭裁判所は確かにサユキさんを女性として認めないでしょうね。日本の裁判所の公式ページには、こう書いてあります」

家庭裁判所は、性同一性障害者であって、次の①から⑥までの要件のいずれにも該当する者について、性別の取扱いの変更の審判をすることができます。

- ① 二人以上の医師により、性同一性障害であることが診断されていること
- ② 二十歳以上であること
- ③ 現に婚姻をしていないこと
- ④ 現に未成年の子がいないこと
- ⑤ 生殖腺せいしよせんがないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること
- ⑥ 他の性別の性器の部分に近似する外観を備えていること

※性同一性障害者とは、法により「生物学的には性別が明らかであるにもかかわらず、

心理的にはそれとは別の性別であるとの持続的な確信を持ち、かつ、自己を身体的及び社会的に他の性別に適合させようとする意思を有する者」とされています。

アキラ



「『現に未成年の子がいないこと』、ってことは、子どもを産んでから変更したくなったら、下手したら子どもが成人するまで十年も待たなきゃいけないってことだよな?」

はるか



「新しく子どもを作ってはいけなし、性別を変える時点では独身じゃなきゃいけないってことも書いてありますね……。つまり、結婚している人は離婚しなくちゃいけないんですか? そんな……」

サユキ



「あと性別変えた後も、自分の好きな人と同性同士になるなら結婚できないし、異性同士になるなら結婚できる。自分の場合は女が好きだから、変に裁判やって性別変えると、惚れた女と結婚できなくなるんだよ」

ヒロミ



「そっか、逆に考えれば、私とマサユキさんは今『同性結婚』できるってわけかい。両方女だけど、戸籍では男女になるんだもんね」

サユキ



「冗談でもマサユキって呼ばれるの嫌だからやめて。戸籍の方が間違ってたんだよ」

ヒロミ



「ご、ごめんなさいい……。でもさ、なんでそんなに不都合なことになるの？」

マヤ



「社会制度というのは人間が作ったものだから、不都合なところや不完全なところがたくさんあるのよ。どういう性別で生きていきたいか、誰を愛していきたくていかといった考えは人それぞれ違うのだけど、現状は男女だとか、同性異性だとか、性同一性障害だとかそうじゃないとか、ある程度まとめて管理する形になっているから、つじつまが合わない部分も出てくるのよね。」

でも、社会制度だけではないわね。こういった、千差万別の性に対するあり方を私たちは普段、学問や医療や政治やおしゃべりの都合に合わせて『男』とか『レズビアン』とか『オネエ』という名前を使って分類しているわ。だからこそ、一つの単語や表現にとらわれすぎることは、誤解やすれ違いにつながってしまうの」

アキラ



「なるほど……」



「おさらいをしましょう。MtF、FtMとよばれる人たちがいます。それぞれ『男から女に』『女から男に』を意味するんだけど、全員が自分を『性同一性障害』という病気だと思うわけでもなければ、全員が手術を望んでいるわけでもないということ。付け加えれば、**M（男）でもF（女）でもなく『X』**、つまり中性や無性やどれでもない性として生きていくことを選ぶ方もいます。そういう人たちは自分のことを『**MtX**』『**FtX**』と表現したりするわ。

こういった方たちをまとめて『性別越境者せいべつこえつきょうしや／トランスジェンダー』と呼ぶこともあるの。でも、越境とかトランスという言葉は、『性別とは男と女のふたつである』という見方に基づいているから、こういう呼ばれ方自体を否定する方もいる、ということは覚えておきたいわね」

レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー……



「なんか、性別のことがよくわからなくなってきました……」



「ふふ、混乱させちゃったかしら。ではここで、人間の性のあり方を、大まかに六つの視点から考えてみましょうか」

生物学的性別（セックス）

オス（男性器を持つもの。より小さな配偶子、人間の場合精子を作り出すもの）
メス（女性器を持つもの。より大きな配偶子、人間の場合卵子を作り出すもの）

社会的性別（ジェンダー）

男（男であると分類されるもの。男の社会的役割を期待されるもの）
女（女であると分類されるもの。女の社会的役割を期待されるもの）

性表現

男装（社会において男のものとされる服装、話し方、しぐさ等により男を装うこと）
女装（社会において女のものとしてされる服装、話し方、しぐさ等により女を装うこと）

異性装いせいそう（女と分類される者が男装すること、または、男と分類される者が女装すること）

性同一性

シスジェンダー（他者に判断された自分の性別を、自分でも選びとっているもの）

トランスジェンダー（他者に判断された自分の性別ではなく、自分であり方を選ぶもの）

Xジェンダー（他者に判断された性別でも、男性でも、女性でもないあり方を選ぶもの）

性的指向

ヘテロセクシュアル（自分と異なる性別の人を恋愛対象にする）

ホモセクシュアル（自分と同じ性別の人を恋愛対象にする）

バイセクシュアル（同性もしくは異性を恋愛対象にする）

パンセクシュアル（同性も異性もどちらともいえない人も恋愛対象、性別で分けない）

アセクシュアル（他者を恋愛や性欲の対象にしない）

ノンセクシュアル（他者を恋愛対象にはするが、性欲の対象にはしない）

配偶システム

モノアモリー（二対一で合意の上での恋愛関係を結ぶ）

ポリアモリー（三人以上全員合意の上での恋愛関係を結ぶ）



「うわー、こんなにたくさんあるの!？」



『『ホモセクシユアル』って、男同士の恋愛のことに限らないんですね。俺ずっと、『ゲイ』と同じ意味だと思ってました』



「あれっ？　そういうえば『ゲイ』と『レズビアン』が入ってなくなーい？」



「そうね。あえて分けるとすれば、ゲイとレズビアンはどちらも『ホモセクシユアル』に含まれるわ。他にも言葉は作られつつづけているわね……例えば、『自分は基本的に異性が恋愛対象だと思うけれど、これからもし同性と恋愛関係が始まっても抵抗ていこうはない』という『ヘテロフレキシブル』だとか』



「へー！　どうして、そういう言葉も一覧にしなかつたんですかー？」

ヒロミ



マヤ



ヒロミ



マヤ



「人間の性に対するあり方は、分類して一覧にできるようなものではないからよ。例に挙げた六つの視点以外にも、他の視点をもつことだってできます。また、例に挙げた男とか女とかいう言葉以外にも、『その中間のどこか』『その両方』『そのどちらでもある』『そのどちらでもない』という人だっているわけね。それから、例えば『女装とはそういう意味じゃない！ 自分の思う意味はこうだ！』という言葉の定義の違いもあるでしょう」

「ううーん……」

「うふふ。ほら、一覧にはできないでしょ？ 更に言うとそれらは、経験や出会いを通して変わることももちろんあるわよね。例えば『自分はホモセクシユアルの男だから女装しないといけないって思ってたけど、男の格好かっこうをしていても好きだと言ってくれる彼氏に出会えた』というように」

「えーっと、じゃあ私の場合、生物学的には多分メスで、社会的性別や性表現が女で、シスジェンダーで、ヘテロセクシユアルで、モノアモリー、ってこと？」

アキラ



「押し付けないこと……やっぱり、それが一番大事なんですわね」

マヤ



ヒロミ



サユキ



えっと、合ってる？」

「他人に聞いたってわかんないよ」

「だって、こんなに細かいんじゃない、人とどう話していいかわかんなくなるじゃない！ 今までずっと、私は女、向こうは男、ただだと思ってたんだもん」

「こうして言葉で見ると、難しいと感じるかもしれないわね。けれどまとめて言えば、心がけるべきことは一つだけだと思うのよ。それは、**集団の傾向や関係を、あくまで集団のものとしてとらえ、個人に押し付けないこと**。例えば『男は女より腕力わんりょくが強い』とか『女は男を恋愛対象とすることが多い』という傾向があったとしても、それはあくまで傾向としてとらえること。『だから女であるAさんは男であるBさんより力が弱いはずだ、弱くあるべきだ』とか『だから女である自分は男を恋愛対象にするはずだ、そうするべきだ』などと言わないことね」

マヤ



「ええ。これだけ多様な性に対するあり方を、正確に分類することや操作することとは不可能なのよ。『性に対するあり方の正しい分類』なんて、存在しないのもの。性は多様になりはじめたのではなく、もともと多様なのよね。大事なことは、『性に対するあり方が近い人たちでお互いに安心感を持ち、性に対するあり方が遠い人たちでお互いの違いを見つめ合うこと』だと思うのよ。そのための見方の一つが、『男と女』であると言えるんじゃないかしら」

セクシユアルマイノリティは「少数」？

はるか



「その……マヤ先生が『みんな違うんだから分けられないのよ、その人自身を見るのよ』っておっしゃっていること、すごく勇気が出るし、信じたいです。でも実際には、多くの人はそういう風に考えないんじゃないでしょうか」

「おー、言うねーはるかちゃん」

サユキ



「世の中、『男の人が好きな女の人』と『女の人が好きな男の人』がほとんどで

はるか



マヤ



すよね。そうじゃない人は、やっぱりとても少ないんじゃないでしょうか。少ない人は、何を考えているか、何が好きか、わかってもらえませんか。わかってもらえなければ、どんなに頑張ってもモテないと思うんです。例えば、例えばですけど……私が女の子を好きになってしまったとしたら、やっぱりその子は、私のこと、変だと思うんじゃないでしょうか。女の子が好きな女の子は、少ないから……」

サユキ



「たしかに、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーなどなど、いわゆる『男性が好きな女性』『女性が好きな男性』以外の人たちのことを、『セクシュアルマイノリティ』とか『性的少数者』と呼ぶことがあるわね。マイノリティという言葉が、『少数派』を意味します」
「略して『セクマイ』って言ったりするね」

マヤ



「実は英語では、同じことを表すのに『セクシュアルマイノリティーズ (Sexual minorities)』、つまり『性的少数者たち』という言い方をしているの。社会通念上『少数派』とされる人たちの中にも、当然ながら個人差・多様性があります。

はるか



マヤ



アキラ



そういうあり方を総括そうかつする時には、複数形で表現する方が誠実である、という考え方に基づいた呼び方なの。「セクマイ」などの複数形でない呼び方は、そういった名前の単一のグループがあるように感じさせる危険もはらんでいるのよ。

ちなみに、『LGBT』という言葉も同様ね。これは『レズビアン』『ゲイ』『バイセクシュアル』『トランスジェンダー』の四つの頭文字をとった名前だけど、さっきお話したように、性的少数者たち全員が、その四つに分類されるわけではありません」

「うん、もっと色々な分け方も、見方もあるんですよね」

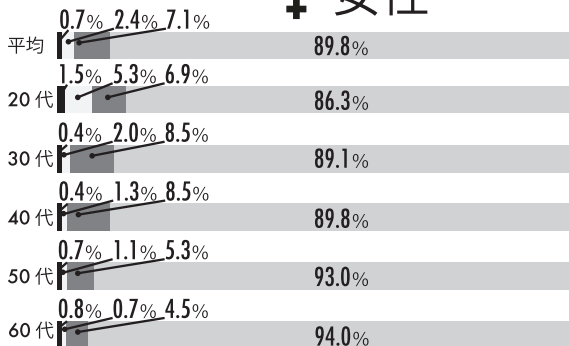
「こうした人たちは、少数派リトルではあっても少数派リトルとはいえません。例えば同性愛者の割合は、日本の中でのAB型や、左利きの人の割合よりほんのちょっと少ないくらいかな。二〇一三年に行われた日本での調査で約一万四千人にアンケートを取ったところ、男性の四・九%、女性の七・一%が同性愛者だという結果が出ています」

「二〇〇人中五人とか七人ということは、小中学校の一人クラスに一人以上はいるくらいの割合ですね……」

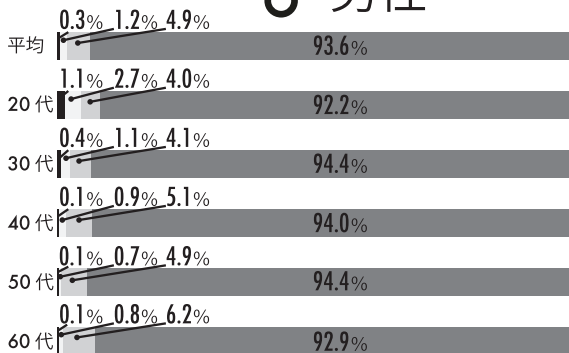
あなたの恋愛対象を教えてください

■ その他 □ 男女 ■ 女性のみ □ 男性のみ

♀ 女性



♂ 男性





「ええ、いるのよ。今も昔も、日本でも海外でも、どんな人の知り合いにも、ね」という……ってことですか？」

「見た目じゃわからないものを無理矢理分けてみた結果がこの数値、ということなんです」とは分けられないものを無理矢理分けてみた結果がこの数値、ということなんです

「見た目じゃわからないこともあるけれど、セクシュアルマイノリティはちゃん



「そうなんだー、私、最初に『レズビアンの人に会ったの初めて』って言っちゃったけど、気づかないうちに会ってたんだなー、きっと」

「そうね、『同性愛者には会ったことがない』と知っている方もいるでしょうけど、それは『同性愛者だと名乗る人』に会っていないだけなのね。ただ、この数字はあくまで、『その調査において自分は同性愛者だと答えた人』の割合であって、絶対的なものではないわ。アンケートで『自分は同性愛者です』と答えることに抵抗がある人もいるでしょう。今はそうでなくても、これから同性との恋愛を経験する人だっているはずだわ。同性愛とか異性愛に限らず、きっちりとは分けられないものを無理矢理分けてみた結果がこの数値、ということなんです」

「普通で正常な人間」って誰のこと？

「外見が男で、恋愛対象が女である男」と「外見が女で、恋愛対象が男である女」

このふたつに当てはまらない人は「少数派」かもしれませんが、けっして「少数」ではありません。「ちよつと『みんな』と違うかも」という考えを抱えたまま、「みんなと同じ」ような「男」と「女」のふりをして生きている人が、実はたくさんいるのです。

世の中には、「同性愛は治るものだ」とか、「色んな性のあり方を認めるんじゃないかって治していくべきだ」とか、「どうして性同一性障害の人の体を手術することばかりして、心を治すことを考えないんだ」という方々がいらつしやいます。性のあり方には「正常／異常」があつて、「異常」なものは治すべきだ、と考えている方々ですね。

わたし自身が、かつてはその一人でした。自分の同性愛は「異常」な性癖せいへきであり、自分にはそれを治す責任があるのだ、そして「普通」の「正常」な人間にならなければいけない、と思い込んでいたんです。

その頃のわたしは、「みんなと同じ」＝「普通」＝「正常」であると、頭から信じていま

した。「普通で正常」でありたくて、たくさんの努力を重ね、空しい結果に苦しみました。あなたが同性愛者だろうがそうでなからうが、こんなに苦しくて意味のないことを、あなたには繰り返してほしくありません。特に性にまつわる自己否定は、したくもない言葉遣いや服装、望まないセックスにつながるからです。

十歳の時、はじめて女の子に恋をし、それを「悪いこと」として押し殺してからというもの、わたしは強烈な自己否定と孤独感の中で生きることになりました。

みんな「好きな男子」の話をしている。占いにも「恋愛運アップ！ 好みの異性との出会いがあるかも!？」なんて書いてある。あげくのはてには学校の先生までこんなことを言う。「みなさんは、これから思春期に入り、異性のことを意識するようになってきます」……。

そうか、それなら異性と付き合わなきゃ！ と、高校に入学してすぐ男性とお付き合いをはじめました。よかった、わたしは普通で正常だ。そう思うと同時に、女としてのわたしに対して飛び込んでくる、こんな言葉がどこか胸を刺していました。

「好きな男性のタイプは？」

「結婚するなら、こんな男は要注意！」

「セックスの時はペニスにコンドームをつけましょうね」

「彼の気持ちをつかむ、勝負レシピ☆」

「男と女の、真実の愛の物語……」

どこを見ても「男と女」が当たり前で、「女と女」についてのことはエロい話か笑いの対象としてしか語られない。家族も友達も先生も、テレビも映画も本も雑誌もラブソングも、みんな「女は男が好きで当たり前」といつているようでした。

思春期に異性に惹かれるようになることを、学校の先生は「正常な発達」と言いました。ならば、わたしは異常なのか。おかしいのか。でもこんなことを誰かに相談したら、噂が広まるかもしれない。みんながわたしを異常者扱いして、わたしは異常者たちの世界に押し込まれてしまうのかもしれない。いやだ。怖い。わたしは異常なんかじゃない。ほら、こうして男の人と付き合っている。ちゃんとセックスだってできる。女の子を好きになっただなんて、あれはなにかの間違いだったんだ。男の体に興奮しないのは、わたしがダメな女だからだ。もっと努力しよう。ちゃんとした女になろう。わたしは異常なんかじゃない。まだちょっと、男の人と楽しむ方法を知らないだけなんだ……。

わたしは、恐くて、消したくて、仕方がありませんでした。女性を好きになった経験のある自分を。男性とのセックスの間も女性の体を思い浮かべてしまう自分を。自分自身が恐くて恐くて仕方がない、そんな気持ちを、「今はちょっとおかしただけだ、努力すれば治るのだ」と抑え込んでいました。

一部ですけれど、わたしがレズビアンを治す努力のつもりでしたことを、書ける範囲で紹介いたします。わたしの親や元カレがこれを読まないことを祈りますが、もし読まれた時のためにも、わたし本人は超真面目にやっていたんだということを付け加えておきます。

1 相性の問題かもしれないと、色んなタイプの男性とお付き合いしてみる。結果、自分がひどいビッチに思えて気持ち悪くなる。

2 レズビアンになりたいだなんて、人と違う自分でいたただけだ、自分は格好つけて女の子を好きになったいわゆるファッションレズだ！ と思いつまもうとする。

3 オトナのおもちや好きな彼氏がくれたシリコン製の男性器（なんか「ブラック・アラブ・デラックス」とかそういう名前だった）を前に、一人で「やだ……素敵……興奮するわあ……」と「男性器に興奮する訓練」をしてみる。ちなみに素の自分では無理だった

ので、自分にとってのイイ女の象徴しょうちゆうだった杉本彩すぎもとあやになりきりながらやる。結果いつの間にかブラック・アラブ・デラックスから興味を失い、「いかに杉本彩になりきるか」の訓練かと化する。

4

高校の先輩が家庭裁判所で女性名から男性名に変え、男性ホルモン注射ちゆうしやを打つためにバイトでお金を貯めた、男性らしい身なりで堂々と彼女を連れてくる姿を見て「わたしも性同一性障害かも！わたしも男になれば女にモテるかも！」と思う。超わくわくしながら男装して男言葉を使い始めたけど、全くモテない。

5

親に隠してカウンセリングに通う。けれど、自分を同性愛者だと認めていなかったため、「なんか苦しいんだけど、性同一性障害？とも違うっぽいし？でも『彼氏に女装させたくなくなっちゃうんです』とか言えないし？っていうかカウンセラーさん（女性）可愛くね？適当に悩み事っぽいことを話して『解決しましたあ！』って言ったら彼女の笑顔が見れるかも！よーしやってみよう！」などと、いちいち架空かかくうの悩み事を相談してしまつて本当のことが言えない状態おちいに陥おちいつてしまい、しかもそのことに自分で気づけなかった。たぶん可愛いカウンセラーさんの笑顔でほわーんとしてたせい。

ダメすぎますね。まあカウンセラーさんが可愛かったのは幸せでしたけど。こういうダメな日々を十二年間も繰り返して、やっとのことで「自分は女が好きで女だ」と認めることができました。そして、あるテレビ番組への出演時に「わたしはレズビアンです。今度女性と結婚します」と言ったことがきっかけで、タレント・レズビアンライフサポーターとしての道が開けました。自己否定をやめ、ありのままの自分で仕事をする日々が始まったのでした。

こっちが心を開けば、相手も心を開くもの。カミングアウトどころか開けっぴろげ状態で生活してみると、自分が隠していたころには相手も隠していた、人々の本音を見せてもらえるようになりました。それは「実は僕もゲイです」「私もレズビアンです」という告白であったり、「ぶっちゃけレズきもい。差別したくないのに苦しい」「自分は性同一性障害の家族に『親に謝れ』と言って傷つけた。罪悪感で苦しい」という告白であったり、また性に限らないことまで、多種多様な告白を受けました。

自分だけがおかしいのだ、と思っていたわたしは、同じように感じていた人が実は周りにたくさんいた、と知って驚きました。それぞれが「言えないけど話したいこと」を、そ

それぞれの痛みを隠していました。「普通で正常」に違いないと決めつけていた人たちも、「自分は普通でも正常でもないかもしれない」という想いをどこかで抱えていました。わたしの思い描いていた「普通で正常な人間」なんて、どこにもいなかったのです。

かつてのわたしは、うらやましくて仕方ありませんでした。「普通で正常」に見える、男を愛せる女が、女を愛せる男が。けれど、「女を愛せる男」に見えていたある人が、こんなことを言ったのが胸に強く残っています。

「自分の体は男で、恋愛対象は女だ。自分は女言葉を使うわけでもないし、女の体になりたいわけでも、女の服を着るわけでもない。けれど、自分はレズビアンじゃないかと思う。恋人といるときに、自分たちを女同士だと想像すると、すごくやさしい気分になって、胸がときめく。相手にうまく言えないし、自分でもなぜなのか理由がわからない。けれど、自分を異性愛者だと思うより、レズビアンの男だと思う方がしっくりくるんだ」

彼のような「レズビアンの男」もいれば、サクキのような「男性器のついた女」もいます。わたしののような「女が好きで、見た目も心も体も女」の人もいれば、例えば「見た目は男だけど男でも女でもない」人もいます。見た目で男／女に見えても、本当に色々なんです。

たとえ相手が見た目通りに「男を愛する女」「女を愛する男」つまり異性愛者であったとしても、そうある理由はそれぞれです。

「異性と付き合うのが普通だと思うから」

「異性の体に興奮するから」

「セックスを通して子どもがほしいから」

「経験として異性しか好きになつたことがないけど、将来はわからない」

「実は男も女もそうでない人も性別に関係なく好きになれると思うけど、今は異性であるこの人を愛している」

「今のところ異性にしか恋したことがないから、たぶん異性愛者じゃないかと思ってる」

「異性に恋したことはないけど、好きになるアイドルや漫画キャラは異性ばかりだから」

「なんとなく、同性愛者ではないと思うから異性愛者かなあ」

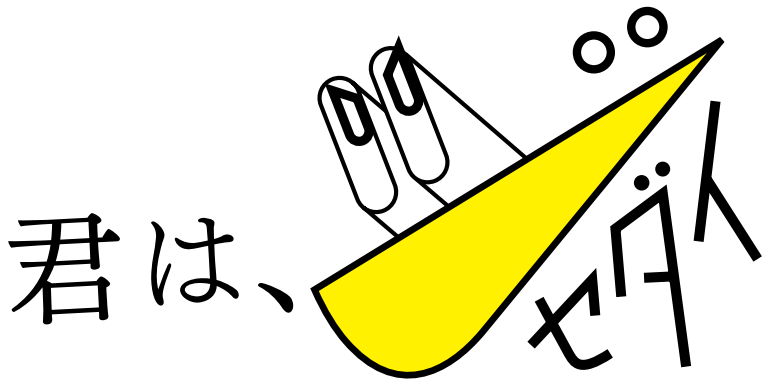
……同じ異性愛者というカテゴリにおいてすらも、なぜ自分を異性愛者だと思っているのか？ という理由はそれぞれです。

マヤ先生が説明していたように、「性的少数者とされる人たち」の中にも、いくらでも多様性が存在します。近年になって、「多様化する社会」というような表現が多く使われるよ

うになりましたが、本来、「多様でなかった社会」というものは存在しないのです。存在していたのは、わたしのように自分から仮面かめんをつけていた人、あるいは「女は結婚して跡継ぎを産め」というように仮面をつけられた人たちです。

「普通」と口に出している時、わたしたちの頭にあるのは「大多数と同じ」もしくは「自分と同じ」くらいの意味しかありません。「正常」の定義だって医学の発達でいくらでも変わってきたのに、どうしてある一点にこだわりつづけなければならないのでしょうか。そのこだわりで、誰のことが理解できるでしょうか。

「自分は普通で正常」の仮面を外し、自分を演じることをやめて心を開いたとき、相手の方も心を開いてくれたという経験をわたしはたくさんしました。「みんなは普通で正常」の思い込みをやめて、みんながそれぞれ色んな痛みや秘密を抱えて生きているんだなあと感じた時、世界がとても愛おしく見えはじめたということを、わたしは今でも忘れません。「男と女」しかない世界はわかりやすかったけれど、ほんとうに安らげる世界ではありませんでした。「普通で正常な人間たち」は、自己否定から生まれる幻想でした。治すべきだったのは、同性愛ではなく、自分や他人に「普通で正常」を押し付けるその思い込みだったのです。



君は、

ゼダイ人

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ イベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!